
乙女心を学ぼう！

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女心を学ぼう！

【Zマーク】

Z8039F

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

妹の恋事情に悩む一護。その原因はある死神のせいだった！？

鳥が飛び交う空に、一人の死神が居た。黒い着物に、オレンジ色の髪。なんともミスマッチな色の組み合わせだが、これが意外にもしつくりくる。雲に触れる事が出来そうな高さに居る彼は、一人何かを考えているようだった。

「……ビーストかなあ……なんて説明しよ」

頭を抱えて、考えている。

「おーい、一護ー！」

青い空に、赤色の髪がよく目立つ。先ほどまで悩んでいたのは黒崎一護。

「恋次…」

赤髪の男は阿散井恋次と言い、一護の良き理解者だった。

「どうしたよ、こんな所で？」

「何だつていだろ」

ほつといてくれ、と言わんばかりに冷たい言い方だった。

「そんなに気になんのかよ、妹の事」

「当たり前だろーがつ！－！－！－！」

カツと振り向きながら怒鳴る。妹、とは姉の方、つまり遊子の事だ。

「別に人間なんて恋するもんだろー? ほうひときや思ひじやねえか」

恋次がため息混じりに言つのを一護は冷たい眼差しで見ながら、「お前に相談しようと思つた俺が馬鹿だった…」と、がっくり肩を落す。

「で、相手は?」

「…外見がだな、髪が逆立つてて、銀髪で背が遊子より少し低くて翠の目で…」

一護の周りの空気がどんどん重くなつていぐ。

「…おいおい、それって…」

「…恋次もそう思うか…」

大きくなつため息をつき、「なんどよつて冬獅郎なんだよ…」と小さく呟く。そして、恋次が

「日番谷隊長は結構」うちでももてるからな…ライバル多いぞ…

と一護の肩に手を乗せながら言つ。

「ちげーよ、そういう問題じゃなくてだな…。何で恋する対象が死神なんだよー! ?」

「んなの知るかよ…。つーか、あの妹、死神見てたんだな

「話を逸らすな! ! !」

しばりくその言い合ひが続く。「…つたく…良いオーラチャン気取りかよ…」恋次が呆れたように言つて、「とにかく、日番谷隊長に

「待てよ、訊くつになにを……おー、恋次つ……」

「つむせえな。田畠谷隊長から思につきりふつもらえば良いだろ」「何でお前はそんな考え方しか出来ねえんだよつー……！」

オレンジと赤色の髪が青い空を徐々に移動して行った。

黒崎家。

「ねえ、夏梨ちゃん。あの子どの小学校なのかな？」
「遊子、アンタといい加減にあきらめなよ」

あいつに会つてから、遊子は何かおかしい。絶対におかしい。つか、絶対あいつに一目惚れしてゐる。

そういう考えをこじ最近毎日のようにしている夏梨は、なんとか田畠谷の事を忘れるべようと「あきらめり」の一点張りである。

「あー、また来てくれないかなあ、あの子」「だあかあらあ、あきらめりのーーー」

夏梨は田畠谷が死神であることを知つてゐる。だから、遊子の恋が叶わない事を知つてゐる。つまり、夏梨には遊子の恋を止めなければならぬのだ。遊子が傷つかないよつに。

「また助けに来てくれないかなあ……」

織姫宅。

「虚に襲われていた茶髪の…お前より少しだけ髪の高くて、苺のピン止めをしてる女の子を助けたか？」

「こきなり何だ、黒崎？」

織姫の家にズカズカと何の遠慮もなしにいきなり入ってくる一護たちに少し困惑をしながら、一護の質問に答えた。

「何何？隊長、何かしたんですか？」

「なんもしてねえよ！何だその明らか楽しんでるような声はーー？」

「冬獅郎くん、なんかしちゃったのー？」

織姫と乱菊も加わって、話がとてもめんべくせくなつてくる。一護は2人を落ち着かせ、事のあらましを説明する。

「隊長、こっちでももてるんですねーーー」

「で、返事はどうするのーー？」

2人のテンションが先程より高くなつており、とても男子軍には手出しが出来なかつた。

「悪いが…俺にその記憶が無い」

田番谷のその声で、一瞬にして場の空気が凍る。

「なつ…何だよ…」

田番谷が慌てたように言つと、乱菊が聞髪入れずに

「隊長、女の子の特徴くらい覚えたならどうですか！…？」

「しるか……俺は女好きじゃねえんだよ……いちいち特徴なんか覚えてられつか……！」

「冬獅郎くんひどこよー女の子一田惚れさせとこてその子忘れちゃうなんて……！」

「そいつが勝手に俺に……ほ……惚れた……だけだろーがッ…………」

「言ひ合いが続き、「……とにかく、返事はどうするんですか、隊長?」

と、乱菊が仕切りなおす。

「んなの……断るに決まつてんだろうが……」

頭を乱暴に5回くらいい揺いて、ため息を大きくくつく。

「冬獅郎、断る時は……その……それとなく……なんつーか……遊子を傷つけないよつこにしてやつてくれよ?」

「黒崎くん優しいね」

「ほんと、隊長とは大違い！」

「んだと?」

日番谷の靈圧が少し上がる。それに少し驚き、乱菊たちは一瞬固まる。そして、次の瞬間、全員の表情がピリシと引き締まる。

「虚か?」

「みたいだな」

一護の問いに、恋次が軽く相槌を打つ。

「一角達がすぐ倒しちゃうんじゃない?」

「あいつらが虚程度を相手に戦いに出るわけねえだろ。俺は行つてくるぜ!」

田番谷は死神の姿になり、窓から颯爽と飛び出す。

「あ、待てよ冬獅郎……まだ話が終わってねえだろ……！」

一護が田番谷を追いかける。「面白そつた事になりそうね」「乱菊がそれに続き、「ちょ…っ、…ったく…」と恋次も嫌そうに続く。織姫は乱菊からの報告を大人しく待つことにした。

黒崎家。

「夏梨ちゃん、あたし買い物行つてくるから、留守番お願いして良い？」

「あ、おい、今は行かない方が…」

夏梨がそつ言つのを聞かず、ドアの閉まる音、そしてそのドアの鍵がかけられる音が聞こえた。

「…つたく…いま虚がつるつるるつての…」

窓から空を見上げてそつ呟いた。

「…もしこれで冬獅郎がまた遊子を助けたりしたら…あたしどう啼めさせたらいいんだよ…」

と、頭を抱えていた。

その頃。

「黒崎、お前はそつちに行け。意外に数が多い。4つに分かれるぞ」

「ちよ……俺の話は……」

一護の話を聞かないで冬獅郎は瞬歩で消えてしまった。

「あのヤロウ……」

「おら、一護ーさっさと行くべがーーー！」

恋次の声に、渋々「おひ」と答えた。

「数が多くて嫌になるな……」

冬獅郎がそう言つたとき、何処からかガサツ、という買い物籠を落す音が聞こえた。

「ん？」

そつちに田をやると、1人の女の子が転がっていたジャガイモや人参を拾い集めていた。その女の子の髪の色は茶色で、背は恐らく畠畠谷と同じか、それよりちょっとでかいくらい……そして、毎のピン止めを付けていた。

(あいつか……黒崎の妹ってのは……助けた記憶なんてねえな……)

そう思つてみると、遊子の近くに虚の気配がした。

「……つたく……」

少しため息混じりにそつちへと飛び降りた。

「 もや…」

遊子はすぐ隣にもの凄く強い風が通り過ぎたのを感じ、辺りを見回した。

「 伏せてろ」

「 え…」

ムリヤリ上から頭を押さえつけられ、その瞬間に頭上に風が走る。直感で分かった。あの子だ、と。

「 お前靈圧意外に凄いんだな、虚が大量に居んぞ」

ボソッと呟いて、「 しばらくそのままな」と言い聞かす。

「 破道三十三、蒼火墻」

右手を前に出して、呟ぐ。日番谷の鬼道は威力が強く、その上攻撃範囲が広い。たいていの虚はやられてしまうだらう。まもなくして、虚は遊子の周りから跡形も居なくなつた。

「 もう動いていいぞ、立てるか?」

「 あ、うん、ありがと…」

差し出した日番谷の手を軽く掴み、立ち上がる。

「 あ、あの…」

「 ジゃあな」

遊子に余計な事を言われる前に、躊躇で姿を消した。

「あ…あれ? 消えちゃったー! ?」

驚いて辺りを見回し、

「… 略前だけでも聞きたかったな…」

と、小さく呟いた。

織姫^{モリヒメ}。

「馬鹿ですか、隊長! ! ?

「何がだ」

乱菊の声に耳を押さえながら口番谷は叫びた。

「ちやんと断らないとダメじゃなーですか! ! カッコつちやんちつて
! ! !

「カッコつちやん! ? 誰が、一体こいつ、ンな事したよー! ?

乱菊の言葉にて、まるで心外だ、とても口番谷が怒鳴る。

「冬獅郎くん、まさか無言での場を立つけたりとか?」

織姫が聞いてきたので、「じゃあな、とだけいってだな…」と小声で言つと、

「それはだめだよー思いつきつ逆効果! !

「隊長、乙女心つてやつ勉強したほうがいいですよ」

2人からやつ攻められ、日番谷は完全に負けてしまい、長々と説教をくらってしまった。

黒崎家。

「わうね、すうひじくかしきよかつたんだよ!...」

遊子のキラキラした目を見て、夏梨と一護は同時に大きくため息をついた。

「ビーすんの、一兄?」

夏梨が小さく一護に耳打ちする。「…ビーもできねえな」と、がっくり肩を落とした。「説得し続けるの結構めんどうさいんだからさあ…」と、夏梨は一護と同じように肩を落とした。

織姫^{アリ}

「…分かった。分かったからもう寝させり…」

「ダメですーちゃんと乙女心を理解してもらわないとーーー」

「そうだよ、冬獅郎くんー」

日番谷は、しばらく眠れない日々が続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8039f/>

乙女心を学ぼう！

2010年10月9日17時23分発行